

# 南朝鮮土着文化の考古学的考察

有 光 教 一

〔要約〕 初期金属文化波及によつて影響を受けた朝鮮土着の文化は、引き続き漢の直接の支配が及ばなかつた南朝鮮において独特の發達を見たのは当然である。その文化を代表する考古学的資料として先ず銅劍を祖形とする磨製石劍とそれを出す埋葬址とを採り上げる。石劍の形式と分布から、朝鮮に特に多く行われた細形銅劍がその源である事を推定し、石劍を出す埋葬址の形式と伴出物を挙げてその文化の性質を考える。一方、新羅の本拠慶州と洛東江流域に分布する長方形墓室の高塚の主体部構造が石劍を出す埋葬址の下部構造と關係が深いことを述べ相互の系統を肯定する。即ち同じ土着民の埋葬址の發達とみなす。然し副葬品は連絡しない事実を指摘し、そのギャップを埋めるものとして金海貝塚以下の初期鉄器時代遺蹟を考える。かくて朝鮮に固有の高塚墳成立の基盤となつた土着文化の性質を明らかにしようと試みた。

## 一 銅劍を摸した石劍の型式と分布

大陸から初めて朝鮮半島に波及した金属文化を代表する遺物の主要なものには、兵器の類と、馬具又は車輿具の類があり、ともに武力と權威を象徴するにふさわしく、石器時代の段階にあつた当時の朝鮮土着民の持物に対比すると、征服者・支配者の文化たる性格がはつきりする。その波及の時期については、明刀錢・穿上横文五銖・貨泉・前漢鏡等を以つて拠るべきインデケイターとする。

西鮮地区では、最初の金属文化の波及に引続き、漢の郡県が確立した。即ち樂浪・帶方郡であつて、前二世紀末から後四世紀初まで四百年の間、いまの平安道と黃海道はその支配下に属した。今世紀初め以来の考古学的業績が如実にその姿を再現した如く、高度に發達した鉄器時代文化がこの地区に榮えていた。然しそれはどこまでも植民地における支配者の文化であつて、土着民のものでなかつた事は、最初の金属文化と同様である。然らばその土着民の文化がいかなるものであつたかと云うことになる、それを明確

ならしめるような組織的な調査は従来殆んど行われていない。遺物包含層・支石墓・組合箱式石棺等のあるものがそれに該当する遺蹟であり、土器・石器のうちにそれを代表する遺物がある筈だが、考古学的な研究が行き届かず、詳しい構造も出土状態も記録されていないために、夫等が楽浪郡と同時代的資料だとする積極的なきめてがない状態である。既往の考古学界は、楽浪郡プロパーの遺跡・遺物の調査に忙しく、同時代の土着文化の実態を研究する時間を十分に持たなかつたので、かような跛行的な結果になつた。

南鮮地区においても、西鮮地区に楽浪・帶方郡が存続していた間の土着文化が、いかなるものであつたかに関する調査研究は、満足すべき進捗を示したわけではない。ただ西鮮地区と違つて、楽浪郡の如き漢の直接支配がなかつた關係上、同時代の土着文化の性格が、西鮮のそれよりも、明確に遺跡遺物の上に現われていると思う。楽浪・帶方郡の統治下にあつた西鮮地区の土着文化は、漢文化の直接の影響を強くうけて、その遺跡・遺物が、これを土着のものとして判断し難い程になつた場合も想像されるが、南鮮地区にはそれ程に強い影響を与える漢文化の移植はなかつた。

楽浪・帶方郡の境界を南に超えた南鮮地区には、既に知られている通り、慶尚北道永川郡琴湖面漁隱洞の革帶飾鉄・帶金具・前漢式鏡其他を含む一括遺物、同慶州郡外面九政里の青銅兵器・鉄製利器・銅製の鐔・鈴を含む一括遺物、同慶州郡外面入室里の青銅兵器・鉄製利器・銅製の鐔・銅鈴を含む一括遺物、そのほか最初の金屬文化波及の跡は多数知られている。にも拘らず、これに継続する大陸文化波及の確かな痕跡は知られていない。即ち楽浪・帶方郡の發達した鉄器時代文化は、南鮮地区に進出するに至らなかつた。

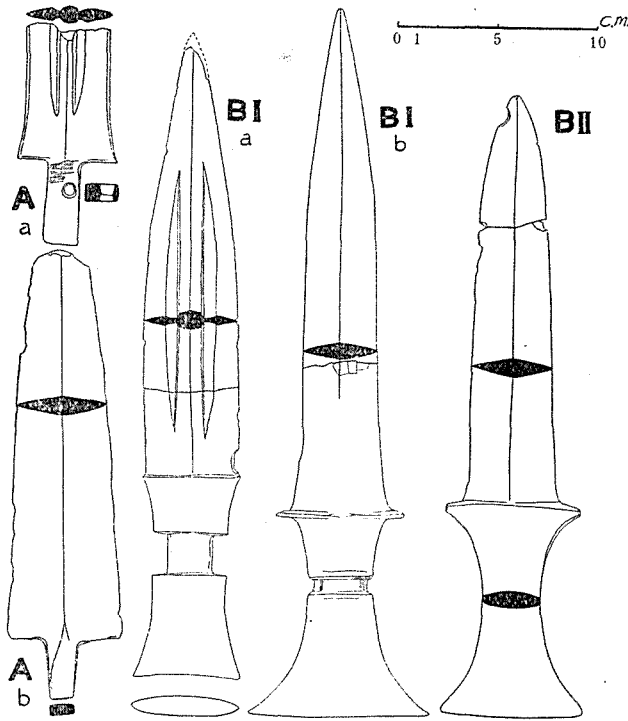
かくの如く、南鮮土着の文化が右に挙げた最初の金屬文化の波及の後、漢文化の直接の影響からは比較的自由であつた結果として、当然西鮮地区とは違つた成長をとげたが、それを説明する恰好の考古学的資料として、私は磨製石劍及びこれを出す遺跡特に埋葬址を挙げる。

銅劍を摸した形と一般に信じられてゐる朝鮮の磨製石劍は、我々が知り得ただけでも百五十を数える。その分布は平安南道新安州と咸鏡南道北青とを北限とし、凡そ次の地域に集中して發見された。(括弧内は石劍の數を示す)慶北慶

州郡(四七)、洛東江流域の大邱附近(二二)及び釜山附近(八)、錦江流域の扶余郡(二〇)及び公州郡(六)大同江流域の平壤附近(一六)である。そのほかは、たとえ漢江の全支流を合せた流域から十三本の発見があつたのをはじめ、疎な分布ではあるが、江原道東海岸沿いにも全羅道にも及んでいて、一応むらなく分布している事が指摘される。

この分布の状態は銅劍類の分布と略一致する。銅劍類の発見が大同江下流域に特に多いのは当然であるが、錦江下流の扶余附近、洛東江中流及び下流域そして慶州附近に集中的である。我々が知り得た石劍の数の約三分の一を出した慶州附近は、銅劍の発見数においても平壤附近に次いで多いことは注目すべきであろう。銅劍類の分布状態のパターンに石劍の分布が似ているこの事實は、次の形式の問題と相俟つて、朝鮮の磨製石劍の起源と発達に重大な関係があると思う。

私は嘗て「朝鮮に於ける磨製石劍の形式と分布」<sup>①</sup>を論じた際、石劍を四型式に分けたが、今は銅劍を祖型とすると



第一圖 銅劍を撰した石劍の型式 (A・a及A・b平壤附近美林里、BI a 慶北慶州神堂里、BI b 忠南扶餘佳増里石室墳、BII 全南高興郡豆原面雲岱里支石墓)

考えられる朝鮮の磨製石劍のうち、その主なもの、即ち大多数を占めるもののみをとりあげて、次の二つに大別する。

(A) 有茎式と、(B) 有柄式とである。

(A) は劍身に短いナカゴを作り出した形で、本篇では単にナカゴ式と呼ぶ。(B) は把をつけた劍の形で、ここではツカ式と仮に呼ぶことにする。

(A) ナカゴ式にも(B) ツカ式にも、劍身の鐙の両側に樋を通すもの—a—と、然らざるもの—b—とがあり、またツカ式にあつては、劍把の中央に細い溝を抉つて上下二段とした—BI—の形と、抉入りのない—BII—の形とがある。(第一圖)。注意すべきことには、BI即ち劍把に抉入りのない式の劍身は、すべてbであつて、樋を通すものを見ない。

扱て東北アジアに分布する銅劍を通観すると、スキート・サイベリア式短劍・支那式銅劍・細形銅劍の三形式が著るしいといふことは、既に梅原末治博士等の指摘された通りである<sup>②</sup>。朝鮮の磨製石劍がそのどれに似ているかを考へて見ると、Aaナカゴ式通樋形は最もよく細形銅劍に似る。Abはその樋を省略したものであろう。把をかたどらないので、スキート・サイベリア式短劍とも・支那式銅劍とも異なる。BII即ちツカ式通樋形は、細形銅劍に劍把をつ

けた形だと思ふ。身に樋を通した形は細形銅劍以外には考へられない。これに對して、BIIはその形制は支那式銅劍に近い。即ち劍身の断面は扁平な菱形であり、支那式銅劍の劍把の節を紐で縛つた形は、石劍の二段になつた把に通ずるものがある。BIIbは、同様支那式銅劍の形に近く、またスキート・サイベリア式短劍のあるものに似る。

以上の比較を表示すると次の如くなる。

第一表

形式	劍把		劍身		類似の銅劍
	I 抉入あり	II 抉入なし	a 樋あり	b 樋なし	
(A) 有茎式			a 樋あり	b 樋なし	細形銅劍
(B) 有柄式	I 抉入あり		a 樋あり	b 樋なし	細形銅劍 + 劍把
	II 抉入なし		a 樋あり	b 樋なし	支那式銅劍
					支那式銅劍及びスキート・サイベリア式銅劍

然るにスキート・サイベリア式銅劍の朝鮮における例といふのは、古物商の手を経た所伝の甚だ不確実な一例が旧朝鮮總督府博物館にあつたにすぎない<sup>③</sup>。また支那式銅劍は所伝不明のものが数例あるが、確実な例として僅に秦戈と

伴出した元平壤第一中学校所蔵の金銅飾柄銅劍及び平安南道出土の元鮎貝房之進所蔵の銅劍の二本を挙げ得るに過ぎない。<sup>①</sup>これに對しその他は細形銅劍に属するもののみで、

梅原末治博士が作られた実測図あるいは写真——以下梅原考古資料と呼ぶ——によると六十五点にのぼる。即ち朝鮮に分布する銅劍は、殆んどすべて細形銅劍又はその系統であつて、支那式銅劍やスキト・サイベリア式銅劍は流行しなかつたと知るべきである。この事實に基づけば、前表のBI・BIIの石劍が、形の上で支那式銅劍又はスキト・サイベリア式短劍に似ているからと言つて、直ちにそれを模作したものとするのには躊躇せざるを得ない。分布論的には朝鮮の磨製石劍はむしろ細形銅劍とむすびつけて考へる方が、妥当だと言わねばならぬ。

そこでBI及びBIIの形が何を表現するかを別の角度から考へよう。私はここでひとつの憶説を提出する。即ちツカ式石劍の祖形は劍把を着装し鞘に収められた細形銅劍であると推定する。細形銅劍は常態では劍把をつけ、鞘に入られてあつたに相違ない。ツカ式石劍はその形を模作したものである。細形銅劍の拵の部分は有機質の物質であつ

たので腐朽し去つたが、磨製石劍がその形を伝えていると、かように私は考へる。今日我々が手にする短い茎を作り出しただけの細形銅劍が、そのままの形で佩用されたものでないことは確かである。その証拠として青銅製の劍把金具の発見や、把部と共鑄の劍身の存在が知られている。尤も夫等の形がBI・BIIの柄部の形と一致しない点に問題が残るのであるが、今は議論が多岐になるので省略し、別の機会に論じたい。

以上を要約するに、前表に示した磨製石劍の形式のうち、A式とBIとは細形銅劍の劍身そのものを写したものであり、樋を通さぬBIとBIIは、形の比較だけから言えば、支那式銅劍かスキト・サイベリア系短劍をモデルとした事になるが、この推定は朝鮮における分布が極めて稀薄であるので消極的となり、ここに鞘に収まり劍把を着装した細形銅劍を模作したとの私見が生れる。尤もBの形式のうちには樋を省略したものがある事は当然考へられる。

扱て梅原考古資料及び私が朝鮮在任当時作つた実測図とに抛り、石劍の分布図（掲載を略す）を作つて見ると、（A）ナカゴ式と（B）ツカ式の分布状態の対照が著るしい。全

半島で出所確實のナカゴ式二十点中、十八点は平安南道及び黃海道の出土で、そのうち十三点は平壤附近である。これに対しツカ式の總數百二十七の中僅か三点だけが平壤附近の発見であつた。そしてツカ式石劍は漢江流域、錦江流域、洛東江流域、及び慶州附近に分布の中心をおき、広く南鮮から見出されている。而も南鮮におけるナカゴ式の発見は僅か二点にすぎないから、ナカゴ式は西鮮の特産であり、ツカ式は南鮮の石劍を代表する。特に南鮮におけるツカ式の發達は著るしく、石劍の流行の頂点をなすと言わればならぬ。その盛んな分布の圈内には未だ支那式銅劍の發見を聞かず、スキト・サイベリア式短劍の確証もないのに対し、細形銅劍の確實な出土例三十六を数えた。中には、ひとつの支石墓群においてBII式石劍と細形銅劍——尤も刃をつけず円い鑄を持つ——とが、別々にてはあるが、發見された例（全羅南道高興郡豆原面雲岱里）もある。即ち分布論的にもツカ式石劍は、ナカゴ式石劍同様、細形銅劍を模したとする所似である。銅劍に対する形態の比較及び分布状態の比較が朝鮮の石劍の起源と發達の問題に重大な關係があると言つたのは、以上の理由からである。

## 二 石劍を出す埋葬址

朝鮮發見の磨製石劍の大半は出土狀況が明らかでない。支石墓以外、石劍が掘り出された場所は地上に著るしい遺構がないので、考古学者が計画をたてて發掘する手がかりがなく、耕作や土木工事の際偶然掘り出された場合が多いからである。旧朝鮮總督府博物館に集まつていた石劍は、概ねそういう偶然の發見品であつた。地方庁は石劍に添えて發見事情を記した文書を送つて来たものだが、ほとんどどれも肝心な点を逸し、遺蹟の構造・伴出物について審かになし難い点が多いのは素人の聞書であるからやむを得ない。私は同館の石劍の実測図を作つた際、地方庁報告の抜書を記しておいた。もとより不十分な記録ではあるが、考古学者による同種遺跡の發掘調査の結果と照合すれば、大体の原状を推定出来る。

考古学者による磨製石劍出土の遺跡の調査は、大正年間における鳥居龍蔵博士、昭和初の小泉巖夫・沢俊一両氏、昭和十年代初の藤田亮策教授によるものが著るしい。夫等計画的調査の結果は、全部が正式の報告書となつて公表さ

第二表 石剣を出した埋葬址一覽

所	在	墓の形式	石剣の形式	伴出物	資料
黄海・殷栗・北部・雲山里	N支石墓	A a ?		鳥居・大五総報 八二四	
〃・鳳山・楚臥・徳岩里	組合式石棺	A a (莖長し)	石鏃三	有光・考雜 三一巻 三号	
〃・長淵・速達・速達里	組合式石棺?	A b (二本)		地方庁報告	
京畿・楊州・楊州・金吾里	石室	A b 及び B II	石鏃一	地方庁報告	
京畿・楊平・龍門・曹峴里	石室	B I b	石鏃一、石庖丁一	地方庁報告	
江原・春川・新北・泉田里	積石塚	B II	石鏃一一・管玉七	有光・考雜 二八巻 七一〇	
〃・楊口・南・松隅里	石室(イ)	B I b	石鏃五	有光・考雜 二八巻 七一一	
〃・寧越・下東・角洞里	組合式石棺	B I b	石鏃七	有光・同右 七一五	
〃・旌善・北面・餘糧里	?支石墓	B I b	石鏃一〇	有光・同右 七一六	
忠南・扶余・扶余・佳増里	石室(イ) 第一号	B II	石鏃二	梅原考古資料	
〃	〃 第二号	B II	石鏃一三	同	
〃	〃 第三号	B I b	石鏃三	同	
〃	〃 第四号	B II	石鏃一〇	同	
全北・錦山・濟原・九億里	S支石墓(乙)石鏃(甲)	B II	石鏃三	地方庁報告	
全南・高興・豆原・雲岱里	S支石墓(イ)・(甲)	B II		古文化綜鑑・一 図版四八	
慶北・漆谷・東明・箕聖洞	S支石墓(イ)	B II	石鏃三	地方庁報告	

〃	・遠城・城北・砧山洞	S 支石墓(イ)	BI b	石鏡六? 赤土器片	地方庁報告
〃	・大邱府大鳳町第一区二	S 支石墓(ロ)及(イ)	BI b	石鏡三、丹塗壺一、赤土器壺二以上	藤田・昭一三研報 八四
	第二区八	〃	BI	石鏡一	樫本・考維三八卷 四号
	〃	〃	BI	石鏡六	同
	〃	〃	BI	石鏡一九、丹塗壺一、石斧一	同
	慶南・昌原・熊南・外洞里	石室(ロ)	BI		小泉・大十二総報 一二九、図鑑四
〃	・益山府大新町	石室	BI b	角形石器、土器片	地方庁報告
〃	・蔚山・彦陽・東部里	石室(イ)	BI a 変形		梅原考古資料

〔表の註〕

N 支石墓は北方式卓子形支石墓  
S 支石墓は嶺南式碁盤形支石墓

? 支石墓は S・N いずれに属するか不明のもの

支石墓の下に(イ)(ロ)等番号を附けたのは主体構造の形式を示す

(イ)は稍々平たい石塊を立て並べて側壁を作つた直方体の石室

(ロ)は小形の平石を何段も平積にして側壁を作つた石室

(イ)は積石

れたのではないが論文や報告書に引用された記事によつて

研究に最も貢献する。

概要を知り得るものが若干ある。就中藤田亮策教授が昭和  
十一・十三年度古蹟調査報告(朝鮮古蹟研究会)中に発表さ  
れた「大邱大鳳町支石墓調査」の結果は、石剣を出す墓の

是等の資料を通観して埋葬址たる構造を分類すると次の  
如くである。(一)板石を以て箱形を組んだ粗製組合式箱形石  
棺。(二)直方体の石室。これに二型式あり、(イ)塊状の稍々平



たい大石数個を立て並べて左右の側壁とするもの、(四)平石を何段も平に積んで側壁としたもの。(三)右の石棺又は石室を中核とする積石塚。(四)支石墓。これに(イ)北方式と(ロ)南方式がある。石剣を出す埋葬址は以上四型式に分たれる。

第二表は私が知つてゐる資料中出土状況の確實な例のみによつて作つた。大方の援助により補正出来れば幸である。

いま各構造につき私の注意を惹いた代表的な発掘例を、西鮮及び南鮮に分けて紹介すると次の如くである。

漢江下流域から北方の西鮮地区には卓子形の北方式支石墓が多数分布する事は周知の如くであるが、黃海道殷栗郡北部面雲山里北方丘上の卓子形支石墓からナカゴ式と思われる通槨の石剣の鋒部破片の発見が報ぜられている外は、石剣出土の例を聞かぬ。他の埋葬址から出た例としては、黃海道鳳凰山郡楚臥面、同長淵郡速達面<sup>⑤</sup>において組合式石棺内からナカゴ式石剣の発見がある。

漢江下流域の京畿道楊州郡楊州面金吾里、同楊平郡龍門面曹峴里では(二)イの石室と推定される遺跡から夫々BIとBIbのツカ式石剣を出し、前者はナカゴ式石剣(Ab)と共存した<sup>⑥</sup>。

これから南方及び東方にひろがるに従い、埋葬址からはツカ式石剣のみが発見される。漢江上流域・錦江流域・全羅道・洛東江流域の各地に石剣を出した埋葬址が分布しているが、出土した石剣はBIbか又はBIのツカ式石剣に限られてゐるのは注目し得る。その埋葬址の種類は(一)から(四)までを網羅するが、(二)イ・ロ或いは(三)を中核とした南方式(碁盤形)支石墓が著るしい。

忠南扶余佳増里の鳳凰山麓において、大正四年鳥居龍藏博士が石剣出土の埋葬址を調査された事は夙に紹介されたところであるが、その遺跡の状態については、調査者が或いは組合式石棺であつたかの如く記し、「有史以前の日本」

——大正十四年版——三九六頁以下)又別の所ではドルメンと記す(「黃海道有史以前遺跡」——大正五年度朝鮮總督府古蹟調査報告八二四頁)等長らく真相がわからなかつた。然るに現在我々が整理を行つてゐる梅原考古資料中に関係地方庁の報告の写しと現場の写真焼付があつたので、それが四基の石室イ、即ち数個の稍々平たい塊石を立て並べて側壁とした直方体の室から出た事が明白になつた。第三号発見の石剣のみがBIbで他の三本はBIであつた。

石室ロの一例に、慶尚南道昌原郡熊南面外洞里の小学校敷地で明らかにされたものがある。非常に形式化されたところのBIの石剣と石鏃十九、石斧一、丹塗丸底小形壺一を出した。調査者小泉顕夫氏が同氏等の「達西面古墳調査報告」(朝鮮総督府大正十二年度古蹟調査報告第一冊一二九頁)の第二十五図に示された通り、塊石及び割石を以て長方形に築いた石室で、四壁は扁平な石を平積とし、底にも石を敷いてある。「図鑑」四輯の記事によるとこの石室は板石を以て上下両層に分たれ、板石を横架して蓋としたものであり、遺物は下層部に充満した土砂中にあつたと云う。

全北錦山郡済原面九億里<sup>⑤</sup>で石剣を出した支石墓は(イ)の石室を、全南高興郡豆原面雲岱里の支石墓は(イ)の石室を積石で包んだ中心構造を、慶北漆谷郡東明面箕聖洞<sup>⑥</sup>の支石墓も(イ)の石室を夫々地下に持つていた。そしていずれもBIのツカ式石剣を出した。慶北達城郡城北面砧山洞のBIb形石剣を出した遺跡は石室イを主体とする支石墓であつた。

「大邱大鳳町支石墓群の発掘調査」は更に複合した形式の支石墓がある事を明らかにした。即ち藤田亮策教授及び榎本亀次郎氏<sup>⑦</sup>によれば、組合式石棺及び石室がひとつの積

石の内に数基並んだ中央の上に一巨石をすえたもの、或いは数基の石室又は石棺がひとつの上石の周囲にならんだ複雑な構造である。言う迄もなく是等複合型は単一な構造の支石墓よりも形式的に進んでいると考えられる、中から発見されたBIb及びBIのツカ式石剣四本は軟弱な石質のもので著るしく便化した形を含むことは注目に値する。

右に挙げた四型式の構造のうち組合式箱形石棺はどこにてもみられ、特にこれのみを以て特色ある埋葬址として強調するわけにゆかぬ。他の石室も積石塚も南鮮にのみ限つて分布する埋葬址と断定することは出来ない。然しそれ等が碁盤形支石墓の下部構造となつて現われるのは、南鮮特有の埋葬址である。その支石墓は漢江下流域より北には無く、慶尚道・全羅道に特に濃密な分布を見る。嶺南式又は南方式の名がある所以である。南方式支石墓はツカ式石剣の分布圏と略々重複した分布状態で、そのなかから石剣が見出される場合殆んどすべてツカ式石剣である。南方式支石墓内発見品のリストは北方式のそれと違つて、磨製石剣と石鏃が特に多い。従つて南方式碁盤形支石墓の発達はツカ式石剣を作つた人々に負うと考えざるを得ない。

ツカ式石剣を作つた人々の間には、然し乍ら、もともと簡単な組合式石棺と無封土の原始的石室を造る葬法があつた。それが巨石をその上に挙げるメガリシック・アイディアを得て聽て彼等獨特の碁盤形支石墓營造の葬法を確立するに到つた。満鮮にわたる支石墓の分布状態から推すと、そのアイディアは北方式支石墓建設者から伝わつたに相違ない。然し中心部の構造には本来の石棺・石室或は積石の形を保持したのであるから支石墓の出現は墓制の基本的な改変を意味するものではなく、伴出の副葬品は殆んど石器時代以来の土器又は石器に限る。従つてその出現は民族の交替によつたものでないと思う。

碁盤形支石墓の流行期間を幾世紀とその年数をはつきり言う資料は無いが、分布のひろがりや稠密さから考へて相当長く続いた事は疑なく、簡単な構造から複雑なものへと形式の推移が認められ、特色をなす巨大な上石の意味も蓋石的なものから標識的なものへと変化のあとが察せられるにも拘はらず、組合箱式石棺と石室の制はつづき、積石的装置もつづいた。

支石墓の副葬品に就いては三上次男教授の苦心になる

「支石墓集成表」<sup>③</sup>がある。南方式碁盤形支石墓内発見品は、磨製石剣及磨製石鏃に固定した感があり、そしてツカ式石剣一本に数本の石鏃を伴う発見が多い事は前掲の第二表によつて明らかである。時に土器を出すことがあるが、南鮮の石器時代土器に通有の赤色無文土器片を混じ、また丹塗磨研の小形壺を出す。然し何物も発見されない例がむしろ多い。上石の下に石棺、石室の如き構造をさえたことぬものも少くない。これは三上次男教授の集成表によつても明らかであり、藤田教授や榎本氏によつても明らかである。學術的調査が行きとどいていない事を考慮に入れても、頗る貧弱な内容でしかない事は確かである。自給自足の生活から容易に作り得るものばかりである。此の事実は、石剣に先行する銅剣が代表するところの初期金屬文化の遺跡の出土品とは対蹠的である。

その初期金屬文化は、梅原博士が地下式木槨墳の一種と推定された慶北入室里及び琴湖面の所謂一括遺物の様な顕著な遺跡をのこしたにも拘わらず、その後その系統を受け継いだと考えられるような性格の遺跡は、南鮮地区では殆んど見られない。即ち初期金屬文化に後続する大陸系文化

の著るしい存在は南鮮地方では未だ確認されていない。考古学的資料に關する限り、B式石劍及び南方式支石墓が顯著な存在として浮び上つてくる所以である。それは大陸文化の後続が消極的となり文化が停滞した結果の一現象として理解される。

これは同時代の西鮮地方に対比して全く対照的である。そこでは銅劍・銅鏃によつて代表される初期金屬文化にすぐ続いて、樂浪郡の經營が進んでいた。大同江下流域を中心とする今の平安道・黄海道には純然たる漢文化の生活が營まれ、その遺蹟・遺物が夥しい事は周知の通りである。

その古墳群は方台状墳丘を戴く高塚式であつて、外觀において支石墓と全く異なる。また内部構造も勿論漢族のそれである。そして裝身具と副葬品が、漢代文化の標式的ものを包含することは、また普く知られている通りである。それは高度に発達した鉄器文化のものであつて、支石墓の石器時代的内容とは天地霄壤の差と言わねばならない。かようなわかりきつた比較をことさら書く理由は、半島の一部に漢本土そのままの生活が營まれ、優れた工芸品進んだ利器がもたらされたにも拘わらず、陸つづぎの南鮮土着のひ

とびとは直接縁のないものであつた事を強調しておきたいからである。漢文化の驚嘆すべき進展を、樂浪郡の遺跡・遺物の上に見るにつけ、これが半島土着の文化に如何なる影響を与えたかと思うのであるが、考古学的資料の上にはその痕跡が殆んど認められない。それは統治者・支配者たりし漢族のものであつて、彼等の間においてのみ享受された文化であり、郡内の土着の文化からさえ浮いたものであつたと思われる。南鮮土着民の生活が、華やかな漢文化から遠いものであつたのは当然である。逆に言えば土着文化の水準が低くて、高級な樂浪文化を積極的に吸収しようとする段階に達してはなかつたと考えられる。

かくの如く西鮮地方に漢の鉄器時代文化が榮えていた時、漢江下流域以南に流行した碁盤形支石墓が土着民に対する支配者的外来民というようなものの墓でなかつた事は確かである。尤も支石墓の巨大な構造は単一の家族の手のみで建設出来たとは思えない。相当の人手を要したであろう事と集合状況特に数十基の支石墓が集まつている状態から族長的な存在が考えられるが、前述の如き貧弱な内容からは、豊かな漢文化に対する土着文化の所産としか思えない。而

も分布状態はほぼ齊一な文化が相当長期にわたつて継続したことを示し、夫等に現われた上述の分化によつて、その間に自から地方差が生じたこと、また時の経過に伴い変遷があつた事を知る。

### 三 南鮮における長方形墓室の高塚

以上の様な文化状態にあつた南鮮が、西鮮地方と同じ水準の鉄器時代文化に到達したのは所謂三国時代、考古学的には高塚營造期に入つてからである。南鮮に高塚墳が行われた最初を確かめることは難しいが、高塚を築くアイディアは、直接又は間接に漢族の高塚墳營造の葬風に由来する事に疑ない。

初て、樂浪帶方郡の漢墓を除く朝鮮の高塚式古墳の墓室には、二つの著るしい型式が認められる。ひとつは横穴式石室墳であり、他は堅穴式石室墳である。朝鮮の場合、然し乍ら横穴式と堅穴式は横からの埋葬、上方からの埋葬という埋葬にあつたつての屍体の搬入方向が問題となるほかに、一墓室が何回も時を隔てて繰返し葬ることが出来る家族墓か、或は一回限りの単葬を目的にした個人墓かの相違が問

題になる。横穴式石室は右の意味での家族墓であるに對し、堅穴式石室は個人墓の構造である。前者は封土の一端から墓室内に通ずる羨道と、その羨道より高さも幅もはるかに大きい主室とよりなる。墓室と羨道とは従つて明確な区劃を以て連なる。後者即ち堅穴式石室は、外部から墓室に導かれる通路の構造が無いのを普通とする。即ち明確な羨道を持たないのである。

三国時代の高塚墳中、前者の典型的なものは、高句麗古墳の石室に多く、その主室は殆んどすべて一様に方形のプランを呈する。私が発掘調査した「慶州忠孝里石室墳」も時代は新羅一統時代に降るが、亦典型的なこの種石室墳である。

後者の典型的なものは、洛東江流域の各地及び新羅の本拠慶州平地に分布する。

まず洛東江流域では慶尚北道善山・星州・達城・高靈、慶尚南道昌寧・晋州・咸安・梁山等に集中的に分布している。既往の旧朝鮮總督府博物館員の発掘調査の結果によれば、夫等古墳は埋葬された被葬者の装身具と副葬品において共通であるばかりでなく、墓室の構造において基本的な

共通点を示す。構造上の共通点の一つは、墓室が縦長の直方体石室である事である。平面が縦長い長方形に、殆んど垂直な壁面をめぐらし、天井には数枚の巨石を横に架し、前後に並べて蓋とする。此の天井の架構方式は墓室の形に従うものにて長方形の平面形に対しては最も自然であり、墓室の長さが三、四米を越えるのを普通とする洛東江流域の石室にとつては、これ以外の架構方法は考えられない。

夫等は亦一葬限りの墓室であること、室の中央に盛装した被葬者を安置し、副葬品を被葬者の頭上にあたる墓室の一半におさめた葬法において類型的な葬法であつたことを示す。

これと同様単葬の堅穴式長方形墓室を持つ高塚墳は従来「慶州の積石塚」と呼ばれた慶州昌南古墳群である。慶州邑城南門外の平地に分布し、高大な墳丘が聳立する壯觀と、金冠塚、瑞鳳塚、金鈴塚飾履塚、壺杆塚等における豪華な副葬品の発見によつて有名である。

その構造は度々説かれた様に、地面を掘りくぼめた堅壇内に木室を組み、これを人頭大の川石の堆積で覆い、上に高大な墳丘を盛る。木材を以て組んだ木室を石積で覆うた

中心部の構造が珍しく、積石塚と呼ばれる所以である。木室の木材は長年の間に腐朽し、石積みはそのために潰えて原形をとどめない。然し少なくとも当初は石積みの重圧に耐える巨大な木材を天井に架し四壁も亦重厚なる木材を重ねたに相違ない。その墓室の復原を試みるならば、疑もなく直方体の箱形で、ここに言う長方形墓室系である。而も室の一半に仰臥伸展の遺骸が恐らく楕に収められて置かれた。室内の他の端、必ず頭の上にある部分が方形の一廓になつてそこに土器を主とする副葬品が一杯に並べてある。

被葬者は必ず一墓室一葬であつて、外方から墓室に入る施設が無い。かような点で前述の石室の場合と同様の手順と装置が想像される。それで私は洛東江流域の長方形石室と慶州昌南木室墳の墓室とは用材を異にしただけであり、基本的な墓室の形状とそれによつて考えられる葬法は共通であつたと思う。

両者の共通点はそのみではない。長方形墓室を積石で包む特殊な構造が、慶州昌南木室墳に於いて顯著であることは右にも述べたが、同様の中核を持つ高塚が洛東江流域の星州、達城、昌寧で知られている。まず昌寧校洞里第十

二号墳（大正八年旧総督府博物館員調査—梅原考古資料による）

は慶州のと全く同じ木室を積石で包んだ式であつた。また私自身大邱の旧忠靈塔附近の石室墳を調査した際巨大な長方形石室が川石の堆積の内にあるのを見出した。野守健氏等発掘の達西面内唐洞五十一号墳<sup>⑥</sup>と同様、二基の長方形石室をひと区劃の石積で包んだ構造であつた。浜田、梅原兩博士の慶北星州郡星山洞二号墳<sup>⑦</sup>も亦同様である。

更に別の共通点は一墳丘多槨式の構造である。一墳丘下に二基又は三基以上の槨室を設けたものを指す。二葬又は三葬を最も普通とするが、主副二槨を以て一葬に当てたものから、極端な例では慶州皇吾里十六号墳の如く一墳壠下た十三の槨があつて八葬を数えたものも知られている。私 は皆て南鮮に於ける多槨式高塚墳に就いて論じた際<sup>⑧</sup>類例を挙げて説明したから一々の詳細はそれに譲る。右の皇吾里十六号墳、慶州皇南里百九号墳<sup>⑨</sup>、慶州壺杆塚と鈴銀塚によつて明らかかなように、是等の多葬は、時を隔てて行われたのであつて、横穴式石室墳に見られる家族墓的埋葬と同じプリシブルに抛り乍ら、而も一回の埋葬毎に、個人墓的な単葬用の長方形墓室を構築した所に特色がある。

洛東江流域の石室墳が普通一般に言われているように、

任那諸國のものであるかどうか考古学的研究は新羅のものとの間の区別が出来る程進んでいない。両者は共通の文化を持つていたので、その遺跡、遺物によつては截然と区別し難いとするのが、むしろ安全である。長方形墓室の構造も、結局、新羅の本拠と任那地域とは共通の根幹を持つ文化があつた事の証拠に外ならぬ。即ち高句麗や他の地域との同時代的墳墓に比較して最も明確な特色を發揮し、固有の墳墓形式を慶州平野と洛東江流域とに保持しつづけたのは、土着の人々即ち韓族をおいて外に考えられない。

#### 四 石剣を出した埋葬址と長方形墓室の高塚墳との關係

新羅の本拠慶州と洛東江流域の各地に、類型的な墓室を持つ高塚が分布する事は、以上の通りである。その墓室の由来を考える時、私は第二章で記した南鮮における石剣出土の埋葬址を想起せざるを得ない。組合石棺は姑らくおき、石室と積石は右の高塚墳中に見られた墓室の構造と同じ性格のものである。即ち石室は直方体の箱形を呈し、堅穴式石室の範疇に入り、必ず一回限りの単葬に供された。小泉

頭夫氏が中からツカ式石剣一、石鏃一九、石斧一、丹塗磨研丸底壺一を発見した慶尚南道昌原郡熊南面外洞里熊南小学校敷地内の一石室は、前述の如き構造であつて、小泉氏は「遼西面古墳の石室の構造は大陸墓制の影響と考えるよりは、寧ろ南鮮各地に存在する支石墓の主体構造、其他の有史以前墳墓の構造に著るしい共通点を認める」(「遼西面古墳調査報告」(一一八・一二九頁)と主張した。

又藤田教授・榎本亀次郎氏等が発掘調査した大邱大鳳町支石墓群の中には、既述の如く、二基以上の石室・石棺が一区劃の積石の中に並び、その中央に大きな上石を載せた例が数組ある。前記高塚墳における一墳丘多槨式と同じ觀念に基づく葬法が行われたわけである。ともに単葬の堅穴式長方形墓室の基本構造を保持したままで家族墓的觀念を具体化したものである。藤田教授は「一基の支石墓内にある數個の石室の關係が一家の親近のものたるべきこと」を言われ、榎本氏は「大邱支石墓群について」<sup>20)</sup>副葬品の有無を被葬者の性別に結びつけ、又石室・石棺の大きさによつて子供と大人を区別し、夫妻と子供を埋葬した支石墓を想像された。同様齋藤忠氏は多槨式高塚墳について夫妻と子

供の埋葬を考えられたことがある。<sup>21)</sup>

これだけ条件が出揃うと、石剣或いは石剣と同時代的遺物を出す埋葬址の構造は、長方形墓室の高塚にその系統を伝えたとせざるを得ない。上石のかわりに封土を盛りあげるアイディアを得たのである。そのアイディアが大陸の墓制に由来することは今更ら言うまでもない。問題は高大な封土を築く墓制を採用し乍ら、主体の構造従つて葬法を變えなかつたところにある。また墓室の形状の類似のみを以て両者の系統を云々するのは、かかる原始的な墓室がどこにても興り得るものであるから、早計であらう。又積石的構造も隔絶した地域で相互の連絡なしにでも発達し得るであらう。然し南鮮の場合は、夫等の綜合形式において、かつ地域を同じうして認められたのであるから、構造上の系統があるとする根拠は十分だと言ひ得る。

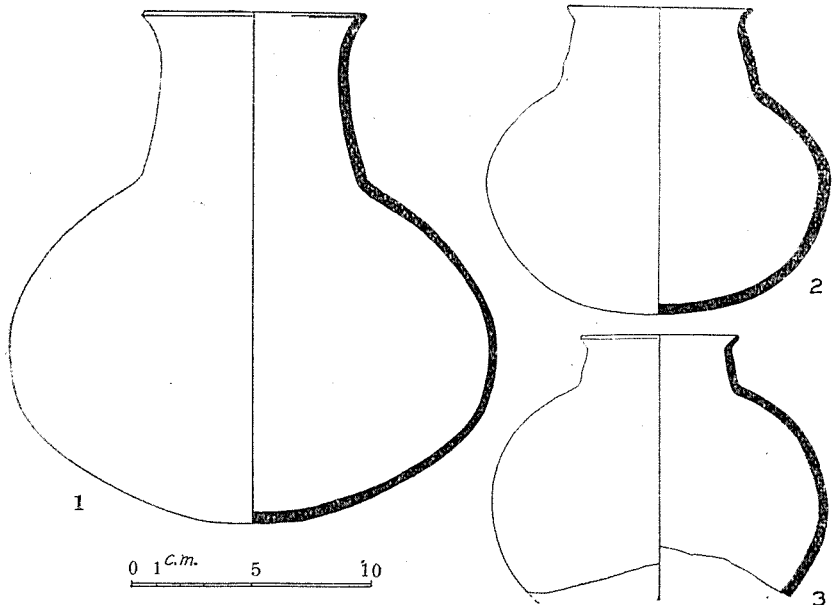
石剣を出す埋葬址が、墓室の構造とそれから帰納される葬法を後の長方形墓室の高塚墳に引き継いだ証拠は、以上の如く積極的なものである。然るに出土品を比較すると、そのつながりは全く消極的となる。高塚墳の出土品は既刊の報告書に明らかた様に、一応完成された鉄器時代文化の



ものである。金銀工・細金細工・鍛治・鑄造・製陶・漆工・玻璃器製造等フルタイムの専門家の手になつた工芸品が集まつており、中には明らかに圏外からの輸入品が含まれてある。これに対し石剣を出す埋葬址からは、第二表に明らかにならぬ如く、石剣及び多数の磨製石鏃が出てゐる外、石斧・石庖丁・管玉・赤素焼の土器等、殆んど自給自足的な副葬品が含まれてゐるにすぎず、特に専門の職人が必要とする作品は少ない。即ち両者の経済的生活の懸隔は格段のもので容易には越え難いのみならず高塚墳の場合は内容に貧富の別があり外貌にも特に著るしい相互の懸隔が認められない。従つて、いかに構造上の連関が連れるからと言つても、石剣を出す埋葬址が直ちに高塚墳に先行したとは、そのままでは理論上承認出来ない。

銅劍・銅鏃によつて代表される初期金属文化が南鮮に波及した時、土着の人々が石器を日常の利器として使つたのは当然である。彼等は石剣を作り始めても、無論石器時代以来の石器を作り使用してゐた。従つて彼等の石剣の中には磨製石鏃と共に或いは実用の利器があつたであらう。

然し乍ら大邱大鳳町支石墓群や慶北達城郡城北面砧山洞支石墓から出た石剣の如く爪の先で削れる程に軟弱な石質のもの、又は形式化して鬩や把頭を極端に尖らせたものは到底実用の利器として有効であつたとは思われない。そういう石剣が複合型の支石墓から多く発見されるのは、石剣の形式化と支石墓の複合化が平行して興つた事を示す。石剣の形が必要以上に誇張しはじめるのは、明らかに墓に入る為の仮器として或いは儀礼用品として作られたに違いない。私はむしろ埋葬址から見出される石剣はすべてその類であつたという印象を受ける。把部は劍把らしく形作られてゐるが、實際に握つてみると実は把握に不便な形である事がわかる。全体美しく磨研され薄い扁平な表現はいかにも銅劍を平面的に写した形に近い。恰も日本の平形銅劍や広鋒銅鏃の如く、實際の利器としての役目からは遠ざかつたものであらう。単独で発見される石剣が多いのであるが、それ等も同様であり、中には木等で作られた棺・室の構造が失われた埋葬址のものもあるうし、また祭祀用に供されたという場合も想像される。共存関係の著るしい石鏃が全く同じ傾向を示すのは当然である。



第2図 丹塗壺 (1:大邱大鳳町第一区第二支石墓, 2:慶南昌原石室,  
3:慶南金海石棺 但し3は榎本龜次郎氏原図.)

またそれら石剣・石鏃に伴つて発見される土器も実用の容器たるよりは祭祀用具とするにふさわしい丹塗小形壺が主なものである。即ち第二図実測図の1は大邱大鳳町支石墓群第一区第二支石墓からBI b式石剣一、石鏃三と伴出した。2は慶南昌原熊南面の小泉氏調査の石室内にBI式石剣一、石鏃一九、石斧一と共存した。3は榎本龜次郎氏が金海貝塚所在の丘で石棺のなかから石鏃二本と共に発掘されたもの、図は同氏原図に拠る。いずれも埋葬用或いは祭祀用の壺として仮器化した石剣・石鏃に似合いのものである。

かくの如く我々は石剣を出す埋葬址のみによつては石剣所持者の日常生活を具体的に知ることは出来ない。しかし乍ら繰返し述べた石剣自体の由来に鑑み彼等が青銅利器を知つていた事は疑いない。ところが朝鮮の青銅利器は同時に鉄器を伴つて伝来した。即ち銅剣・銅鏃と共存した鉄刀・鉄剣・鉄鎌・鉄斧の発見、銅剣・銅鏃に鉄鏽が附着したままの青銅利器の発見等、その証拠は十分である。従つて間もなく鉄器主用の時期に入つたと考えられる。

魏志の記事に見ゆる如く、楽浪・帶方二郡に供給した程に盛んに鉄を出す地域であつたから、南鮮は鉄利器の材料に事欠かなかつた筈である。その製作は銅劍・銅鐔の鑄造よりも技術的に容易であるから、その方法は間もなく土着の人々によつて会得され普及したであらう。むろんそれは刀子とか鎌とか斧頭とかの小形品であつた。初期金属文化伝来当初から高塚墳營造期に到る間の遺物を含む慶南金海貝塚<sup>⑩</sup>をはじめ、慶北大邱達城<sup>⑪</sup>、同慶州月城等<sup>⑫</sup>の遺跡からそのような小形鉄器或はその証跡が発見されたことは報告書の示す通りである。銅劍を祖型とした石劍の所持者が、かような鉄製利器を知らなかつたとするのは、むしろ自然である。

また初期金属文化と共に南朝鮮に大陸の土器作りが伝来した事実については、私が前に土器を中心として「朝鮮の初期鉄器時代文化について」(『東方学』第十輯)論じた際、例を挙げて説明した通りである。

然るに石劍を出す埋葬地からは鉄器の発見は全く無く、また大陸伝来の土器作りによる土器の発見を聞かない。これは遺跡が埋葬という特殊の営みに関するもので、埋葬用

或いは祭祀用に作られたもののみが遺存した結果と解されよう。尤も鉄器の使用が始まつても直ちに石器時代の土器・石器の使用が廃されたのではなかつた事は、僅か乍らも石器時代赤色の無文土器片を混ざるものがあつた事からも察せられる。そして銅劍類は稀少なものとなり、鉄器は日常の利器として生活の必需品であつて而も余剰が出来る程には多量に生産されていなかつたであらう。その事がまた石劍・石鏃の仮器化を助長したに相違ない。土器についても同様であつたと思う。石劍・石鏃を出す埋葬地の時代の文化は、凡そ金属器や進んだ築法による容器を盛んに生産する段階に達していたとは思えない。それが時の経過と共に漸次発達して高塚墳が示す彼の高い文化の段階へと進んで行つたのであるが、その間の変遷を一応あとづけ得る遺跡が、洛東江流域に比較的多数知られている。これは金属文化波及当初からの遺物を含む初期鉄器時代の遺蹟であつて、慶尚南道金海貝塚を以てその代表的なものとする。

即ち浜田耕作・梅原末治両博士によつて報告された金海貝塚は、石器時代の赤色無文土器系統の土器とともに青灰色陶質・叩き文土器・黒色素焼・黒色磨研・白色陶質等明

らかに初期金属文化と共に伝来した窯法の土器を出し、後者において最も特色を發揮した。そして青灰色陶質・叩き文土器は赤色無文土器系の所謂赤焼土器と共に後の長方形墓室高塚墳の副葬土器に系統を伝えた。青灰色陶質器は発達して新羅焼となり、洛東江流域高塚墳の土器の主要な部分を占めるに到つた事は周知の通りである。叩き具 (Paddle) したたく土器作りの手法は新羅焼にも適用され、円筒形丸底甕及び甗の形をした少々軟質で灰色のたたき文土器が新羅焼及び赤素焼土器と共に高塚墳に副葬されている。その赤素焼土器は石器時代以来の赤色無文土器の後裔である事は疑ない。

慶南東萊・固城・梁山の貝塚 慶北大邱達城・慶州月城の遺跡の土器についても、右の金海貝塚土器と同様の事が言えるのであつて、慶州及び洛東江流域の長方形墓室高塚墳は副葬品の面で是等遺跡に系統をひく。

前述の如く南鮮には最初の金属文化波及に続く漢文化の顕著な遺跡を見ない。つまりその後は大陸文化の支配的影響は無かつた。金海貝塚以下の右に挙げた遺跡もこの事情を反映して、初期金属文化と共に伝来した窯法のうちか

ら選択された土器作りが、繼續して行われ、高塚墳營造期に及ぶ事を示す。その間数世紀、それらは土着の人々の土器になつていたのであり、石器時代以来の窯法も共に存するのである。

以上述べたところを綜括すると慶州平野の木室を主体とする高塚墳及び洛東江流域の長方形墓室の高塚墳は、墓室の構造の面では石剣を出す埋葬地の主体部構造の形を壮大にし齋美にしたものであり、副葬土器の面では金海貝塚等が代表する初期鉄器時代遺跡の土器の系統を繼承する。金海貝塚以下の諸遺蹟にあらわれた文化が、高塚墳の副葬品に示される高度の鉄器時代文化の成立の基盤となつたことは疑ない。

尤も高大な封土を盛りあげる新たな葬法の採用、多数の進歩した技法による製品の副葬は、ひとり土着文化の自力の発達の結果に帰すべきではなく、大陸からの輸入乃至刺戟が強力な推進力となつていたのであつて、私は青灰色陶質器から発達した新羅焼の成立には大陸の窯法の影響を認めるものである。高塚墳の高大な封土、嚴重な墓室、豪華にして豊かな副葬品は国家的統制が確立して始めて実現し

たのである。前国家的部族社会から国家的統制への發達には、強い推進力が内からも外からも働いたのであつて、以上の考古学的事実はその間の情勢を具体的に示していると思う。

石劍を出す埋葬址と金海貝塚以下の初期鉄器時代遺蹟とは、かくの如く、高塚墳の成立に寄与したところの土着文化を代表する遺蹟である。共に同じ初期金屬文化の波及に深い關係を持ち、共に石器時代以来の土器を出すのであるから、實際年代の上で重複する部分があるのは疑ない。然し乍らこの両系統の、一方は埋葬址であり他は生活に關する包含層であるところの、遺蹟の具体的な關係を示す考古学的な發見は将来に残されている。また既往の考古学界は盛期の高塚墳の發掘調査に忙しくて、前期の高塚墳を調査する機会を持たなかつた事も反省せねばならない。高塚墳成立以前の朝鮮文化の考古学的研究を推拂させるには、これ等の發見なり調査なりが果される事が必要だと思ふ。また以上の所論が南鮮の土着文化を取扱い乍ら、漸次洛東江流域と慶州平野に限定されることになつたのは、私の所謂初期鉄器時代遺物の包含遺蹟の發見が、洛東江流域に限ら

れて他に及んでいないこと、及び後に百濟の領域に入つた南鮮西半における古墳の調査が、専ら一部の特殊構造の高塚に集中したことから、資料がおのずから限定された結果にはかならない。然し、その限界内で韓族本来の文化の性質に触れる事が出来たと思ふ。

— 昭和三〇年九月九日 —

- ① 人類学雜誌 第五四卷第五号(昭和一四)
- ② 朝鮮古文化綜鑑 第一卷(昭和二二) 五—七頁
- ③ 「南朝鮮に於ける漢代の遺蹟」朝鮮總督府大正十一年度古蹟調査報告第二冊、一五三—一五五頁
- ④ 同右 一一六頁及び一五〇頁
- ⑤ 鳥居龍藏 朝鮮總督府大正五年度古蹟調査報告八二四頁
- ⑥ 有光教一 考古学雜誌第三一卷第九号
- ⑦ 黄海道庁報告写による
- ⑧ 共に京畿道庁報告写による
- ⑨ 全羅北道庁報告写による
- ⑩ 梅原末治・藤田亮策「朝鮮古文化綜鑑」第一卷 函版第四八及び八七頁
- ⑪ 慶尚北道庁報告写
- ⑫ 朝鮮古蹟研究会 昭和十一年度古蹟調査報告及び同十三年度古蹟調査報告
- ⑬ 考古学雜誌 第三八卷第四号

⑬ 樞本龜次郎前註

⑭ 「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」朝鮮總督府大正十一年度古蹟

調査報告

⑮ 朝鮮總督府昭和七年度古蹟調査報告第二冊

⑯ 朝鮮總督府大正十二年度古蹟調査報告第一冊 圖版六六及び

五九頁

⑰ 史林 第二八卷一號

⑱ 齋藤忠 朝鮮總督府昭和九年度古蹟調査報告第一冊

⑲ 朝鮮古蹟研究会昭和十三年度古蹟調査報告

⑳ 金元龍 「慶州九政里出土金石併用時代遺物に就いて」歴史学

報 第一輯 (釜山)

㉑ 浜田耕作・梅原末治 「金海貝塚発掘調査報告」(朝鮮總督府

古蹟調査報告第一冊)

㉒ 小泉・梅原・藤田 朝鮮總督府古蹟調査報告第一冊

㉓ 有光教一 「石器時代の大邱」(大邱府史)

㉔ 三上次男 「朝鮮における支石墓の在り方について」史学雜誌

第六十二篇第四号

執筆者紹介

三品彰英 同志社大学教授

愛宕松男 東北大学助教

田中裕 京都大学講師

石田善人 京都大学大学院特別研究生

水津一朗 大阪市立大学助教

天野元之助 大阪市立大学教授

有光教一 京都大学助教

杉村壮三 汎愛高校教諭

末尾至行 京都大学助手

But in China the variety of natural conditions and social development gave rise to the local deviations in the irrigative customs. I am therefore concerned with the formation of such customs according to the geographical localities mainly documented in the materials which I collected in China and moreover referred them to the new social developments under the Communist government. There the irrational institutions with decaying feudalism are in the process of reform and unification.

## Archaeological Study on the Indigeneous Cultures of Southern Korea

By

Kyoichi Arimitsu

From the Yellow River Basin and Northern Asia the first metal culture, which were represented by the weapons, harness and chariot fittings, spread over Korea, and then the colonization by Han started in 108 B. C. The Han colonists can be recognized from a large number of burial mounds, in which the characteristic Chinese relics of highly developed Iron Age culture have been found. In Southern Korea, beyond the boundary of Lo-lang, very few concrete evidences of the Lo-lang culture were found, while over 150 finds of polisyed stone daggers, which were undoubtedly imitated by the contemporary native people the bronze daggers of the first invaded metal culture prior to the development of the Han colony, were reported. Some of these stone daggers were found in the prehistoric graves, among them the so-called "dolmens" are most significant. The beneath constructions of the dolmens as well as the common prehistoric graves, in which the stone daggers were found, are classified into stone cists, rectangular chambers and some of them are covered with a heap of stones. Such constructions are functionally similar to those of the burial chambers covered with mounds which were common in Southern Korea during the Time of Three Kingdoms (4-7 century A. D.); the latter having an elongated, paralleled-sided chamber or gallery with no functional distinction of a passage, usually for a single inhumation and some are covered with a heap of

stones under a mound. Although the funerary goods found in the latter belong to the highly developed Iron Age and contrast with those of the former which suggest the neolithic self-sufficient economy, earthenwares are reminiscent the pot-sherds taken from refuse deposits of the Early Iron Age which are scattered in the basin of the Naktong River and Kyongju vicinity. Influenced by the Chinese civilization the native people of Southern Korea achieved the elaborate Iron Age, but they maintained their own manner of the inhumation inherited from their stone-age ancestors, as shown in the constructions of their burial chambers.